学会報告

第26回日本農村医学会総会参加記録

上市厚生病院長　越山健二

昭和52年10月20日、21日の両日第26回日本農村医学会総会が名古屋市の勤労会館で愛北病院長、伊藤恭平氏の会長のもとで行なわれた。既に設立後4分の1世紀を経た農村医学会も完全に定着し、演題数も 185の多きさに達し、これら演題のほか高木名古屋市立大学長の「日本における中国医学の現状と将来」と題する特別講演、神奈川歯大野田先生の「農作業に起因する呼吸器障害に関する研究」と題する宿題報告、千葉大内田先生司会による「農村社会における生産構造と健康」というシンポジュウムの3つの主題が発表された。私は、その前日の10月19日に行なわれた評議会に出席し農村医学会賞や金井賞がそれぞれ和泉昇次郎氏、横山登志子両氏に決定したとの報告や役員改選、昭和53年の第8回国際農村医学会がアメリカ合衆国のソルトレーク市で行なわれるなどの報告を聞いた。会終了後、サッポロビール社に附属した洪養園で歓迎会があり、文字通りビールをパイプで引きこんだ豪華なもてなしを受け、さすが 200万の人口を容する名古屋市や愛知県の偉容を感ずる事が出来た。愛知県は、木曽、長良、揖斐(いび)の三川に恵まれ肥沃な濃尾平野を背景にして古くから農業を中心にして発展してきた事をいまさら感じさせられた。愛知県下には厚生連傘下に9病院を開設し、昭和51年、ベッド数3,072床、職員数 2,800人、年内、延外来患者 177万人、延入院患者92万人を診療するとともに本部内に農村検診センターを設置し、検診車2台、健康管理指導車1台、輸送車2台、職員30名をもって県下18万の農家を巡回し、農村の健康管理に努力しておられ、仲谷義明愛知県知事の農をもって基本となし、健康づくりも農業を地盤としたなかからおし進めたいと言うせつせつたるあいさつがあり、大きな工業県でありながら、知事の農業に対する深い理解と愛情に対しては大きな共感と尊敬の念を深めた事であった。

総会の内容については、立派な学術講演集が既に発刊されているので記述は割愛させてもらうが、学会が発足して以来26年、その間の農村や農業は量的にも質的にも変化し、農村経済の基盤も農業以外の部門に転換を迫られている。兼業形態は必然的に婦人層に労働の負担がかかり、機械化は激しい労力の消耗を新しく付加する傾向がある等、新らしい情勢は、次から次へと農村の新しい保健問題として迫っており、4会場で14部門に亙る研究発表、討議が活発に行なわれた。

尚、富山県農村医学研究会からは「富山県農家世帯の糖尿病調査（第2報）」を石田礼二他が発表した。参加記録としては甚だしく粗略なものであるが了としてほしい。